

平成 23 年
4 月 27 日

病害虫発生予報 5 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！
一薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょうー

< 目 次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：イネミズゾウムシ	1
麦類：赤かび病	2
ナシ：黒星病	2
ナシ：ナシヒメシンクイ	3
促成・半促成ピーマン：アザミウマ類	4
半促成ピーマン：うどんこ病	4

【その他の病害虫】	5
水稲，ナシ，促成トマト，促成キュウリ，メロン	

II. 今月の気象予報

「病害虫情報」の名称が「病害虫速報」に変わります。

昨年度まで病害虫の発生状況に応じて「病害虫情報」として臨時情報を発表していましたが、今年度からは「病害虫速報」と名称を変更して、的確な情報をより迅速に発表しますのでよろしくお願いいたします。

なお、「病害虫発生予察警報」や「病害虫発生予察注意報」及び、「病害虫発生予察特殊報」は例年同様の名称で発表します。

水田において農薬を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とすること。

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel:029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. イネミズゾウムシ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
やや遅い	—	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、気温から予想したイネミズゾウムシの活動開始時期は平年よりやや遅い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並と予想される。したがって、水田における発生時期も平年よりやや遅いと予想される。

[防除上注意すべき事項]

- ① 越冬場所となる山林等に接した水田では発生が多くなる。また、本虫は5月上旬頃から水田への飛来量が多くなり、地域の中で早く移植された水田に発生が集中する傾向があるので、このような水田では育苗箱施薬等の対策を行う。
- ② 移植時期が震災により遅くなり、本田での生息数が最高に達する時期と重なった場合には、被害が大きくなるので注意する。(防除所レポート参照)
- ③ 例年発生が多い水田や特に②の条件となる水田では、育苗箱施薬を行う。
- ④ 5月上旬の稚苗移植の場合、特に育苗施薬を行わなかった水田では、10株あたり8頭以上の成虫が認められたら本田防除を実施する。本田防除は5月下旬から6月上旬頃に行う。
- ⑤ 中干し等の栽培管理を徹底し、イネの健全育成に努める。

防除所レポート [積算気温によるイネミズゾウムシの発生予測]

- ① イネミズゾウムシの発育に有効な気温の積算値から本田での生息数が最高に達する時期を予測すると、県央・県南・県西地域は5月下旬頃、県北・鹿行地域では6月上旬頃になると予想される(表)。
- ② 発生時期の予測は4月25日現在である。今後の気温により時期は前後するので注意する。

表 イネミズゾウムシ成虫の生息数が本田において最高に達すると予測される時期(4月25日現在)

地点	本年(予測)	平年
常陸大宮	6月2日	5月28日
水戸	5月30日	5月25日
鉾田	6月3日	5月26日
土浦	5月23日	5月18日
下館	5月21日	5月20日

※ イネミズゾウムシの発育零点を13.8℃とし、3月1日からの有効積算温度が120日度となる日を予測した。

※ 水田の立地条件、イネの栽培条件により発生時期は前後する。

麦 類

1. 赤かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや遅い	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 二条・六条大麦の出穂期は平年よりやや遅い。小麦の出穂期は平年よりやや遅い見込みである。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 小麦は、出穂期から穂揃い期に開花を確認したら防除を開始する。播種時期によって生育ステージが異なるので、圃場ごとの生育状況をよく確認し、適期に必ず薬剤散布を行う。
- ② 本病原菌は、六条大麦・小麦では開花期、二条大麦では穂から葯が押し出されてくる時期（穂揃い期の 10 日後頃）が最も感染しやすい。この期間に降雨が続き、気温が 18～20℃以上になると本病の発生が多くなるので、この期間の気象には十分注意する。
- ③ 発病の好適条件が続く場合は、1 回目の薬剤散布の 7～10 日後に 2 回目の散布を行う。2 回目の散布を実施する際は、系統の異なる薬剤を散布する。
- ④ 倒伏や収穫の遅れにより発生が助長されるので、適期収穫に努める。また、含水率の高い麦を収穫した場合、袋の中で本菌が蔓延することがあるので、収穫後は時間をおかず適切な乾燥調製を行う。
- ⑤ 被害残渣やイネ科雑草は翌年の伝染源となるので、土壌中にすき込んで腐敗させる。

(平成 23 年 4 月 7 日発表の病害虫情報 No. 15 参照)

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや遅い	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 昨年 10 月下旬の調査で、秋型病斑の発病度、発生地点率ともに平年よりやや高かったため、菌の越冬量は平年よりやや多いと予想される。
- ② 4 月下旬現在、発病果そう率は平年よりやや低い。
- ③ 「幸水」の開花は平年より 1 週間程度遅れているため、本病の発生時期も遅れていると考えられる。
- ④ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並、降水量は平年並か少ないと予想され、発生を特に助長する条件ではない。

(ナシ 黒星病 続き)

[防除上注意すべき事項]

- ① 果そう基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第除去し、園外に持ち出して適切に処分する。また、園内に落葉が残っている場合は早急に落葉を集め、土中深く埋める。
- ② 落花期の DMI 剤散布は、黒星病を防除する上で特に重要であるので、圃場をよく観察し、ナシの生育に合わせて適期に確実に実施する。
- ③ 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ (越冬世代～第一世代)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4 月下旬現在、県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへの誘殺数は多発した平成 18 年と同程度で、4 月第 5 半旬までの総誘殺数は過去 11 年中 2 位である。
- ② 地区予察圃（かすみがうら市）に設置したフェロモントラップへの 4 月第 5 半旬までの総誘殺数は、過去 5 年中 1 位である。

[防除上注意すべき事項]

- ① コンピューザーNを使用する場合は、5 月中旬までの早い時期に 150～200 本/10a 設置する。
- ② 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(平成 23 年 4 月 21 日発表の病害虫速報 No. 1 参照)

防除所レポート [積算気温によるナシヒメシンクイ第一世代の発生予測]

- ① 県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへのナシヒメシンクイ越冬世代の誘殺数は、4 月第 3 半旬に最高に達した（図）。
- ② ナシヒメシンクイの発育に有効な気温の積算値から、次世代（第一世代）の誘殺数が最高に達する時期を予測すると、**6 月第 4～第 5 半旬**になると予想される。
- ③ ナシヒメシンクイ第二世代幼虫を対象とした防除適期は、第一世代の誘殺数が最高に達した日から 7～9 日後なので、6 月下旬～7 月上旬である。
- ④ 発生時期の予測は 4 月 26 日現在であるので、「病害虫発生予報 6 月号」等の今後の情報を引き続き参考にする。

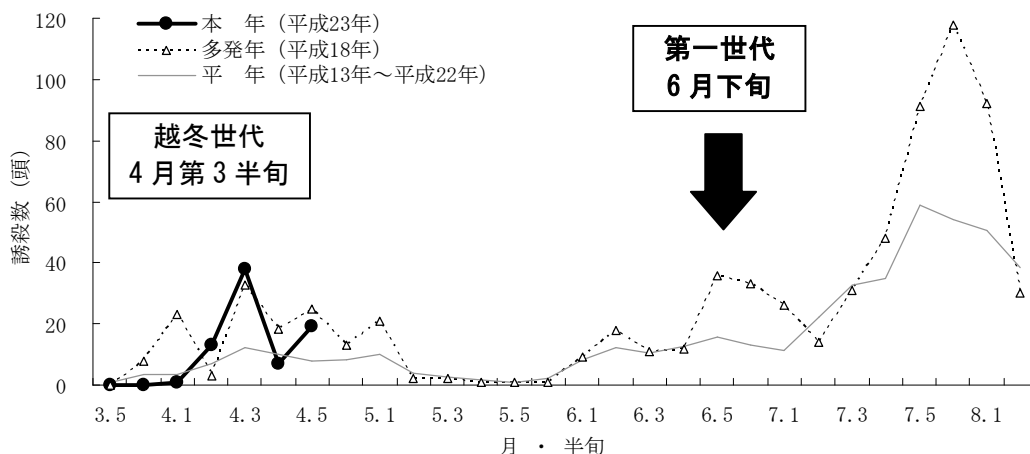


図 フェロモントラップによるナシヒメシンクイ雄成虫の誘殺数の推移 (笠間市)

促成・半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、寄生花率及び発生地点率は平年より高く、被害果率は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。また、各種ウイルス病を媒介するので注意する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や花にもよくかかるよう、十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

半促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、発病葉率、発生地点率ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう、十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、系統の異なる薬剤を散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネドロオイムシ	—	昨年の発生量は平年より多かった。常発地や昨年多発した水田では育苗箱施薬を行う。
ナシ	アブラムシ類	発生量：平年並 ～やや少ない	4月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。発生密度の低いうちに参考防除例に基づいて薬剤散布を行う。
促成トマト	タバココナジラミ	発生量：平年並 ～やや多い	4月下旬現在，平年並～やや多い発生である。本虫は，黄化葉巻病を媒介するので注意する。
促成キュウリ	アザミウマ類	発生量：多い	4月下旬現在，平年より多い発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	4月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
メロン	つる枯病	発生量：平年並	4月下旬現在，平年並の発生である。
	菌核病		

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率について

ヒメトビウンカ越冬世代虫について、イネ縞葉枯ウイルス（RSV）保毒虫率の調査を行った結果は以下のとおりである。今回、調査を行った県西地域の定点や昨年生育期間中に縞葉枯病の発生が認められた筑西市の圃場付近においては、保毒虫率は前年より低い傾向だった。しかし、昨年発生が認められた地域については、本年の水稻栽培においても本病の発生が懸念される。

なお、過去の事例から、小麦で増殖したヒメトビウンカの第一世代虫の発生量が多いと、縞葉枯病の発生が多くなると考えられる。今後、小麦において生息虫数の調査を行い、発生が多い場合には情報を提供するので参考にする。

1. 調査方法

平成23年3月2～11日にヒメトビウンカ越冬世代虫を採取し、ラテックス凝集反応法によりウイルスの保毒の有無を調査した。

2. 結果の概要

- ① イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、定点であるつくば市大形が0%（平年0.6%）、結城市大谷瀬が0%（平年2.4%）であった（表）。これらのことから、県内のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、全体的には低く推移しているとみられる。
- ② 平成20年から水稻生育期において縞葉枯病が確認されている圃場（筑西市二木成）付近での保毒虫率は、筑西市二木成が0%、筑西市野殿が3.0%、筑西市西方が5.4%でいずれの地点においても前年より低下した（表、図）。
- ③ 上記3地点の範囲からやや離れた筑西市嘉家佐和の保毒虫率は5.1%で前年よりやや高く、筑西市羽方では0.5%と低かった（表、図）。

表 ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率

採取地点名	供試虫数 (頭)	保毒虫率 (%)			
		23年	22年	平年値 (10年間平均)	
つくば市 大形	118	0	0	0.6	
結城市 大谷瀬	203	0	1.6	2.4	
筑西市	二木成	132	0	11.0	—
	野殿	67	3.0	11.7	—
	西方	130	5.4	12.9	—
	羽方	187	0.5	—	—
筑西市 嘉家佐和	176	5.1	4.1	—	

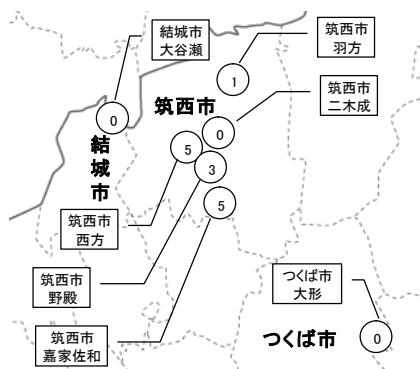


図 イネ縞葉枯ウイルス保毒虫の発生状況（○内の数字は保毒虫率）

3. 防除対策

- ① ヒメトビウンカは春先になると麦畑へ移動し、そこで増殖した後に水田へ侵入するので、麦畑に隣接する圃場では注意する。
- ② 水稻の生育初期の感染を防ぐため、昨年発生が目立った圃場では育苗箱施薬によるヒメトビウンカの薬剤防除を実施する。また、必要に応じて本田防除（6月下旬）を行う。

病害虫発生予報の見方について

病害虫防除所では、向こう1か月の病害虫の発生を予想した病害虫発生予報を毎月発表しています。予報の作成にあたっては、圃場巡回調査や病害虫防除員の情報等による現地における病害虫の発生状況、フェロモントラップ等による害虫の発生状況を過去のデータと比較しながら、向こう1か月の気象予報等を参考にして作成します。ここでは予報の見方について説明しますので参考にして下さい。

1. 予報の構成

予報は、向こう1か月の間に多発生が懸念され警戒すべき病害虫や、例年その月に発生が問題となる病害虫について記載した「注意すべき病害虫」と、「注意すべき病害虫」ほどではないが、例年より発生が多い等注意を要する病害虫を記載した「その他の病害虫」で構成されます。

【注意すべき病害虫】

例)

イチゴ

予報の対象地域

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	多い	県下全域

向こう1か月間の発生予報として、発生時期と発生量を平年値との対比により予報します。発生時期は、「早い」、「やや早い」、「平年並」、「やや遅い」、「遅い」の5段階、発生量は、「多い」、「やや多い」、「平年並」、「やや少ない」、「少ない」の5段階で表記します。発生時期や発生量を特定しない場合は、「-」で表記します。

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、被害葉率、発生地点率ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

予報を推定した根拠を記載します。圃場巡回調査やフェロモントラップ等への誘殺状況等に基づく現在の発生状況、予想される気象条件が対象病害虫に及ぼす影響等について記載しています。

防除を行う際に、注意すべき事項等について簡潔に記載しています。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤防除の際は、薬液が葉裏や葉柄にも届くよう、十分な量を丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、系統の異なる薬剤を散布する。
- ③ ミツバチ導入後は、薬剤のミツバチへの影響に十分注意する。

病害虫発生予報の見方について（続き）

【その他の病害虫】

主に発生量に基づいた発生予想について記載します。発生量や発生時期については、注意すべき病害虫と同様に各5段階で表記します。

例)

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
促成ピーマン	斑点病	発生量：やや多い	2月下旬現在、平年よりやや多い発生である。

現在の発生状況等を中心に記載します。その他、特記事項や防除対策について簡潔に記載する場合があります。

2. 予報等に記載される用語について

病害虫防除所が発表する予報等の病害虫に関する情報では、いくつか特徴的な用語を使用しています。ここではそれらのうち、主に記載される用語について簡単に解説します。

県予察圃

農業総合センター農業研究所と園芸研究所に設置している圃場です。無防除圃場等における病害虫の発生状況を調査しています。

予察灯

夜間に電球を点灯し、光に集まる虫を毎日誘殺する装置です。害虫の発生状況を把握するために利用しています。

フェロモントラップ

主に性フェロモンを誘引源として、対象害虫を誘殺する装置です。対象害虫の発生状況を把握するために利用しています。

発病度、被害度

調査圃場における対象病害虫の発生状況等を客観的に把握するため、調査株を被害程度別に区分・集計して数値化したものです。

発生地点率

当所の圃場巡回調査で、対象病害虫の発生や被害が見られた圃場の割合です。

3. 今年度特に注意して調査する作物

今年度は以下の作物を中心に予報を作成します。

水稻、麦類、サツマイモ、ダイズ、ナシ、ブドウ、カキ、クリ、イチゴ、ピーマン、トマト、キュウリ、メロン、ネギ、ナス、ハクサイ、レタス、スイカ

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 4月23日から5月22日)

気象庁 (4月22日 発表)

<向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	40	30
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

<1週目の予報> 4月23日(土曜日)から4月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率 40%

<2週目の予報> 4月30日(土曜日)から5月6日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

<3週目から4週目の予報> 5月7日(土曜日)から5月20日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず、良く洗浄しましょう。